

飛鳥藤原の円板

はじめに 飛鳥藤原地域では円板がしばしば出土する。しかし古代の円板はほとんど研究されていない。そこで全体的な様相を検討し、今後の足がかりとしたい。

円板とは、土器や瓦の破片を打ち欠いて、まるい板状に整形した遺物である。各地で出土し、縄文から近世まで報告されている。しかし用途は定説がなく、各地・各時期の円板が一連の遺物かどうかさえ明らかではない。円板・有孔円板・紡錘車 本稿では、土器片などからつくった無孔品を「円板」とする。転用ではなく当初から意図して粘土を成形、焼成したものは「真正品」と呼ぼう。円板の真正品はいまだ確認されていない。円板に類似した遺物として紡錘車があり、真正品は「紡錘車」。土器や瓦を転用したものは「転用紡錘車」だが、かならずしも紡錘車とは限らないので「有孔円板」も用いる。

今回の調査は飛鳥藤原宮跡発掘調査部蔵品を対象とした。2004年1月時点で、円板407点、転用紡錘車（有孔円板）44点、紡錘車14点に達する。

素 材 転用した土器・瓦の器種や時期の比定は困難な場合も多いが、弥生土器から近世陶器（図19-6）まで多種多様である。大半は土器を用い、瓦は全体の1割程度にとどまる。土師器と須恵器はほぼ同数である。器種・部位は、土師器・須恵器とも甕の体部が多く、特に須恵器では7割を占める。甕体部のゆるい湾曲、1個体から多数の破片を得られることが好まれたのであろうか。土師器は杯類も比較的多い。屈曲部は用いず、湾曲が緩い部位を用いる。弥生時代も甕が多い。中世の報告例には高台部を利用した円板が多数あるが、飛鳥藤原には中近世も含めてそのような円板はない。

形 状 円板の形態や加工技法は、時代が異なってもよく共通している。円板は円形が基本だが形は精粗があり、長方形（7）、不整形の例も少数存在する。転用紡錘車も精粗がある。形態はさほど重要ではないらしい。真正品の紡錘車は基本的に整った円形である。

円板の加工技法 各地の円板と同様、打ち欠いただけの円板と、外周側面を研磨する円板がある。研磨度を4段階にわけると、0：打ち欠いたまま。1：割面の稜をわずかに研磨する。2：比較的良好に研磨して面をなすが、割

面も比較的に残る。3：丁寧に研磨して割面がほとんど残らない。ところで研磨度2の円板には一部をよく研磨し、ほかは割面のままという例がある。これは整形時の研磨の偏りであり、使用痕や意図的な集中研磨ではない。

研磨度0、1の円板は輪郭を気にしない円板といえる。対して研磨度2、3では輪郭を整形することに留意している。前者を1類、後者を2類としよう。すべての円板の4分の3は1類である。研磨度からみて最も特徴的なものは、瓦製円板である。1類と2類がほぼ同数あり、丁寧に研磨する精製品が比較的多い。1類の平均直径6.1cmに対し、2類は4.3cmと小さい。瓦製円板は厚さと径の比率が土器製円板とは異なるので、径が小さいと全体形状も大きく違ってくる。精製の瓦製円板は、土器製円板とは別種の遺物とみるのが妥当だろう。

土器製円板では、圧倒的に1類が多い。とくに須恵器製円板ではほぼ1：10の割合で1類が多数を占め、なかでも研磨度0の粗製品がもっとも多い。土師器製円板でも1：3ほどの割合で1類が多くなっている。

転用紡錘車（有孔円板）の加工技法 途中品の状況から、外周側面を研磨した後に穿孔することを追認した。したがって、すでに穿孔してある転用紡錘車（2）は、外周側面が打ち欠いたままでも途中品ではなく完成品である。転用紡錘車は、ほぼ1：3で1類が多い。

円板の法量 円板の平均値は直径4.2cm、厚さ0.8cm、重量22.4gとなる。材質ごとにみると、瓦はやや大きく、土師器はやや小さい。中近世の陶器は小型品が多い。計測値を並べると、直径10cm以上のものは点数が少ないこともあり大型として分離できるが、そのほかは直径2～9cmに切れ目なく分布する。厚さ・重量は素材に影響されるのでまとまりがない。したがって、大型品以外を法量で明確に区分するのは難しいが、便宜的に4cmを境に小型と中型にわけ、10cm以上を大型とする。小型品は側面を研磨した精製品が多い。

紡錘車の法量 紡錘車の平均値は直径4.7cm、厚さ1.6cm、重量30.5g。同じく転用紡錘車は直径4.0cm、厚さ0.6cm、重量13.6g。円板と同様に、直径は2～7cm大が連続的に分布しており、大きさによる分類は難しい。また、転用紡錘車と円板の法量分布は重なっており、円板と転用紡錘車の未穿孔品を弁別することはできない。

破損・使用痕跡 円板の多くは完形品である。擦痕など

はほとんど見られない。すなわち、ほとんどこすれたりしない使用方法で、破損しなくても役目を終えたと考える。異物が付着する例もあったが、いずれも埋まっていた土に由来するものか、転用前の焦げなどであった。

数少ない使用痕跡をもつ例として、75次調査出土の瓦製円板がある(8)。凸面・凹面とも非常に平滑な面になっている。外周側面は研磨度0、直径は6.5cmで、握りやすい大きさである。これは平らなものを擦るのに使用した砥瓦の一種と考えるのが妥当である。

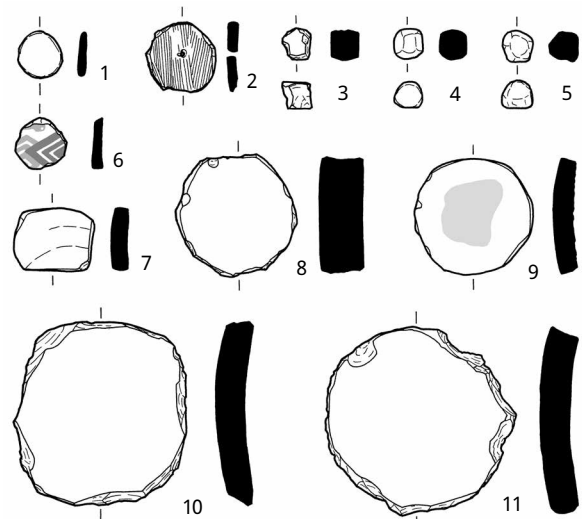
出土遺跡と傾向 円板は多数が出土する遺跡と、ほとんど出土しない遺跡がある。今回の集計では、石神遺跡が171点と突出して多い。大半が7世紀の円板と考えられる。藤原宮跡も99点あるが、弥生土器と中近世の土器で半数を占める。飛鳥池遺跡も41点を数える。対照的に寺院からはほとんど出土していない。本薬師寺6点、和田廃寺3点、飛鳥寺・田中廃寺2点、川原寺・山田寺・奥山廃寺・豊浦寺1点。吉備池廃寺の15点は中近世のものと考えられ、ほかも時期を判断できるものの多くは中世以後である。寺院にほとんどない、という事実は円板の性格を考える上で重要である。しかしその理由は現段階ではわからない。

用途 用途は百家争鳴である。多くの先行研究を渉猟した川吉謙二は、ひとつに限定されることなく様々な使われ方がなされたと述べた。以下、いくつか検討しよう。

灯心押さえとする説(兼康保明、山口格)を適用すると、真正品がない点が気になる。石神遺跡、藤原宮跡でも土器片の灯心押さえを使用したのか。それに灯心押さえならば寺院で多数出土してもおかしくない。油や煤の付着も確認できなかった。山口が提示したように付着物から灯心押さえと認めうる円板が存在するとしても、大多数の円板は灯心押さえかどうか検討の余地がある。また反対に、一乗谷出土の灯心押さえは有孔円板と類似しており、転用紡錘車の用途も再検討すべきかもしれない。

祭祀具説では、元興寺極楽坊出土の円板が冥銭とされ、近年では有孔円板を模造銭とみる意見などがある。飛鳥藤原でも出土状況をよく検討する必要がある。

今回、石神遺跡SE800出土の瓦製大型円板2点(10・11)は、祭祀遺物と考えた。なんら使用痕跡がないこと、実用品とは思えない2cmほどに打ち割ったり研磨した瓦片(3~5)、凸面が擦れた中型円板(9)とともに、井戸



1: 飛鳥池遺跡 2: 石神遺跡 3~5・9~11: 石神遺跡SE800
6: 吉備池廃寺 7: 藤原宮 8: 藤原京
図19 円板 1: 4

の埋土から出土したためである。敷衍すれば、大型だけでなく中型にも祭祀具を含む可能性がある。

これ以外の諸説も、遊戯具では駒石と円板の精製品が似ているし、紡錘車末製品としての円板は当然あり得る。しかし各説とも決め手を欠き、すべてを説明しうるものではない。円板として一括される遺物には、性格が異なる遺物が混在していると考えるのが妥当である。

まとめ 提示されている円板の用途の多くは思いつきの域を出ないが、限定できない以上、それらも考慮せねばならない。大乗院庭園で報告された遊具と同様の近現代の瓦製円板も出土しており、数十年前には表採した古瓦で同様の遊具を作成していたとも聞く。このような要素も含めて、雑多な円板をいかに分別してゆくかが今後の課題である。また、中国では漢長安城未央宮に、韓半島では楽浪郡治址、慶州にある雁鴨池や天龍寺址、朝鮮時代の水原古邑城跡などに、瓦製紡錘車、その末製品とされる瓦製円板、土器製円板が報告されている。日本とのかかわり、円板の用途を考える上で無視できない資料であり、今後は東アジアも視野に入れて円板を研究しなければならない。

(石橋茂登)

参考文献

- 秋山浩三「古代日本における銭貨のイミテーション」『歴史民俗学』14号、批評社、1999。
- 兼康保明「中・近世の小型円板とその用途」『考古学叢考 中巻』、吉川弘文館、1988。
- 川吉謙二「土製円板小考」『紀要 創刊号』、財団法人のじぎく文化財保護研究財団、1996。
- 山口 格「『小型円板』再考」『研究紀要』第8号、三重県埋蔵文化財センター、1999。